



Title	明治期大阪鑄物業に関する研究
Author(s)	松田, 学士
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45790
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 まつ だ がく と
松 田 学 士

博士の専攻分野の名称 博 士 (経済学)

学 位 記 番 号 第 19170 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 17 年 3 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 1 項該当

経済学研究科日本経済・経営専攻

学 位 論 文 名 明治期大阪鋳物業に関する研究

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 澤 井 実

(副査)

教 授 宮 本 又 郎 教 授 阿 部 武 司

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の課題は、機械工業を支える重要基礎部品工業＝素形材産業である明治期大阪の鋳物業を取り上げ、在来鋳物技術と近代鋳物技術の継承関係、機械鋳物市場の出現が鋳物業者たちに与えたさまざまな影響、鋳物関連商（鋳物関連原材料商、金物商など）の役割、鋳物業者の組織化の動向などを検討することによって、従来ほとんど未開拓であった明治期における大都市中小工業の実態を明らかにすることである。

本論文は序章、第 1～4 章、終章から構成されている。序章「課題と方法」では戦後における鋳物工業史研究が概観されたうえで、鋳物工場の特質を「多量性と零細性」の視角から否定的に理解するのではなく、鋳物産地の地域特性、鋳物業と産業集積との関連、日用品鋳物・土木建築鋳物・機械鋳物の相互関連、さらに鋳物業者を取り囲む商人たち（鉄商、コークス商、金物商）の役割を検討することによって、明治期大阪の機械工業の発展を支えた鋳物工業のダイナミズムが明らかにされなければならないとされる。

第 1 章「明治期における機械鋳物業の形成」では、近世以来の日用品鋳物業から機械鋳物業が専門分化するプロセスが検討され、第 1 に官営工場や民間大経営とは異なり、主として職工数 10 名以下の零細鋳物工場では在来技術・設備の漸次的変化によって近代化が推進されたため在来鋳物業と近代鋳物業の間には人的・技術的連続性が濃厚にみられた点、第 2 に明治後期の大阪では市中心部を圍繞する形で鋳物工場の 5 つの集積が確認され、そこでは関東の鋳物業に特化した川口などとは違って鋳物工場と機械工場の混在が確認でき、両者が相互補完・共存関係にあったことが実証されている。

第 2 章「明治後期における機械鋳物市場と機械鋳物業者の展開」では、鋳物製品市場の動向が内外需別に検討され、国内の安定した日用品鋳物市場の役割、輸移出に占める綿繰機、金庫、印刷機、原動機などの意義が大きかったことなどが確認され、続いて明治期の大阪で活躍した 12 名の中小鋳物経営者の経営展開を追跡することによって、「鋳物専業一貫型」（①日用品鋳物専業、②日用品鋳物から機械鋳物へ、③機械鋳物専業）および「機械工業進出型」の経営類型を析出している。

第 3 章「明治期大阪における鋳物関連商」では、鋳物業者を取り巻く鉄商、コークス商、金物商といった鋳物関連商の経営実態と地理的分布が検討され、鋳物関連商のなかでは経営規模がもっとも大きな鉄商は西区立売堀を中心に立地し、平均経営規模が鋳物業者よりも大きい金物商は明治前期から鋳物工場の集積地であった南区に数多く集まった。また比較的規模の大きな鉄商間の連携が緊密であったのに対し、金物商は小規模乱立状態を特徴とした。

第4章「明治期における大阪鋳物組合の再編」では、鋳物業者の組織化の実態と機能が時期別に検討される。具体的には近世の真継家支配と大阪の鋳物師仲間の関係、株仲間解散後の営業上の混乱を修復するために組織された任意組合、大阪堺市街商工業取締法と同業組合準則に基づいて組織された各鋳物関連組合、重要物産同業組合法によって同業者の強制加入が可能になった機械鋳物組合の動向が分析され、その結果、以上のような組織再編の背景には「粗製濫造」問題への対応が絶えず存在したにもかかわらず、大阪器機鋳物製造同業組合の事例からは品質検査機能はほとんど発揮できず、組合活動の中心は強制加入の徹底、職工争奪の取締、同業者間の調停仲裁にとどまっていたことが明らかにされる。

終章「総括」ではこれまでの分析結果が要約され、近代鋳物技術の導入を在来鋳物技術で補完した中小鋳物工場の技術動向、機械工場と相互補完・共存関係にあった鋳物工場が形成する5つの集積地（複合集積地）の存在によって可能となった柔軟な鋳物製品供給、日用品鋳物専業者にとどまる業者から代表的機械製造業者にまで成長する鋳物業者までの幅広い経営展開、鋳物業者の活動を側面から支える鋳物関連商の重要な役割、同業者組合の限定された機能などが確認され、最後に機械鋳物という多品種少量生産の展開を支えた複合集積地とそのネットワークの重要性が指摘される。

論文審査の結果の要旨

本論文の貢献は、明治期大阪における機械工業の発展を支えた鋳物業の展開過程を、技術、生産、経営、組織化、原材料購入と製品販売、市場の諸側面から丹念に追跡することによって、鋳物工場や機械工場、さらに工場用品業者などとともに形成された複合集積地の存在が、多種多様な機械器具製品の供給を可能にした重要な1条件であった点を明らかにしたことである。資料的制約から鋳物業者の経営分析、業者間の取引実態の検討がやや手薄な点などを問題点として指摘できるが、これらはいずれも筆者の今後の課題であり、本論文は博士（経済学）の学位に値するものと判断する。